

Ann B. Stahl,

*Making History in Banda:
Anthropological Visions of
Africa's Past.*

Cambridge: Cambridge University Press,
2001, xix+268pp.

たか ね つとむ
高 根 務

はじめに

アフリカには歴史がない、とヘーゲルが語ったのは19世紀前半のことであった。そしてこのような「語るべき歴史がない暗黒の大陸アフリカ」という考え方は、1960年代まで欧米の歴史学者の間では普通のことであった〔永原 2001〕。その後アフリカの歴史についての研究は急速に進展したが、王国や都市文明を有していた地域に比べ、辺境地域に位置していたマイノリティの歴史に関する研究はまだ十分に行われていない。

本書はガーナ中西部に居住するマイノリティであるバンダ人 (Banda) の歴史を文化人類学、歴史学、考古学の手法を統合することにより明らかにしようとしたものである。著者のスタールはこの3つの学問分野の知識と方法を駆使することにより、1300年代から現代にいたるまでのバンダの人々の日常生活とその変遷を再構築する。さらにそのミクロな生活世界での変化を外部世界との交易・抗争や植民地支配など、より広い政治経済的な変化との相互作用の中に位置付けようと試みる。700年間という研究対象の時間的な長さ、異なる学問領域の成果の統合、そしてミクロ世界とマクロ世界の相互作用への注目など、本書は多くの面で極めて野心的である。

著者は1982年に考古学者としてバンダの居住地に入り、その後86年からは口頭伝承の採集などの文化

人類学的手法も取り入れながら、継続してバンダの歴史を研究している。彼女の業績を見ると1980年代はそのほとんどが考古学に関するものだが、90年代以降は歴史学や文化人類学の分野での刊行物も多くなっている。

本書の構成は以下になっている。

- 第1章 アフリカの過去に対する屈折した見方
- 第2章 アフリカの生きた過去を描く
- 第3章 現代に生きる過去——バンダにおける歴史づくり——
- 第4章 政治経済的コンテキスト
- 第5章 ニジェール川交易を背景とした地方生活——1300-1700年——
- 第6章 変化するバンダ住民の社会——1725-1825年——
- 第7章 変化するバンダ住民の社会——1825-1925年——
- 第8章 考察——歴史人類学とアフリカの過去の構築——

I 本書の内容

第1章および第2章ではアフリカの歴史の解明に対して文化人類学、歴史学、考古学のそれぞれがどのようなアプローチをとってきたのかが批判的に概観され、同時に本書のアプローチと構成が提示されている。とりわけユニークなのは本書の構成である。本書では、時間の流れに沿って古い時代から順に歴史を再構築していくというようなオーソドックスな歴史叙述のスタイルを採用していない。逆に著者は最初(第3章)に20世紀のバンダ人の現状を提示する。この分析に際して援用されるのは参与観察や聞き取り、口頭伝承の収集などの文化人類学的なフィールドワークの成果であり、その対象はミクロなバンダ人の生活世界である。続く第4章では分析対象が一転し、12世紀から20世紀にかけてのバンダ人を取り巻くマクロな政治経済的な動向が概観される。そして第5章以下では再び分析対象がミクロに戻り、考古学資料や歴史文献資料などを駆使しながら14世紀以降のバンダの生活が時間軸にそって再構成され

ている。本書の構成におけるこのようなミクロとマクロ、現代と過去の間の頻繁な転換は意図的である。著者はこれによって、現代の生活世界に反映され続けているバンダの歴史を読者に提示するとともに、彼らのミクロな生活世界が西アフリカ全体の歴史変化とどう関係しているのかを明らかにしようとしているのである。

現代のバンダを描いた第3章では王位継承にまつわる抗争を事例にとりながら、バンダにおいて歴史がいかにつくられ、その「歴史づくり」(making history)の過程にバンダ社会の権力関係がいかに反映されているのかが明らかにされている。バンダ人は言語民族的に異なる複数の社会集団によって構成され、王を頂点とした政治システムを形成している。ところが1977年の前王の死後、その継承者をどの社会集団から出すかについての権力抗争が長期間にわたって続き、対抗勢力間の暴力事件にまで発展した。この抗争の過程で対立する社会集団の権力者達は、王位継承に関する自分たちの正統性を主張するため自分たちに都合の良いそれぞれの「歴史」をつくりあげた。ここで興味深いのは、バンダの権力者達が自分たちに有利な歴史づくりの過程で人類学者達を利用している事実である。王位の座にある有力な社会集団の長老達は、対抗する集団から王が選出された過去の事実を削除するなど自分たちに都合のいい部分のみで構成された「バンダの歴史」を口頭伝承として語り、人類学者はこれを集めて公刊する。そしてその公刊された「歴史」はバンダの権力者達によって自らの権力の正統性を示す証拠として利用される。著者自身も王族以外の社会集団から口頭伝承を採集する際に王の一族を同席させるようにと王から求められたり、バンダの人々向けに書いた小冊子の中身の一部を「黒塗り」にして削除するよう長老達から求められるなどの経験をしている。権力を持つ側は自らに都合の良い歴史を積極的に語る一方で、他集団の有利になる歴史に関しては意図的に口を閉ざす。このような「歴史をつくる」過程に介在する権力関係に注目することは本書の重要な視点のひとつである。

第4章では視点がマクロに移り、バンダを取り巻

く広い世界での政治経済状況の変遷が歴史的に跡付けられる。12世紀以降のニジェール川地域とギニア湾岸との間の交易、15世紀以降のヨーロッパ列強の進入、18～19世紀に拡大したアサンテ王国の勢力、19世紀からのイギリス植民地支配など、バンダを取り巻く西アフリカ地域は大きな政治経済変動を経験してきた。著者はこれらのマクロな変動を押さえたうえで、次章以下でこれらの歴史の大きな流れの中に位置するミクロなバンダ社会の変遷をつづっていく。

第5章では考古学的発掘調査の成果に基づき14～17世紀のバンダの物質文化と外部世界との交易の実態が明らかにされる。当時のバンダでは陶器や鉄製品の制作が活発に行われ、その一部は交易を目的としたものであった。逆にこの地域では作られていなかったガラスビーズなどの装飾品も同じ発掘現場から発見されており、これも当時の交易の結果を示すものである。さらには16世紀にヨーロッパ列強によって沿岸部に持ち込まれたとされているトウモロコシも発掘されている。これらの考古学的資料は当時のバンダの日常生活がニジェール川地域やギニア湾沿岸地域との交易のもとに成り立っていたことを示している。

第6章では考古学、口頭伝承、文献史料をもとにして18世紀から19世紀初頭までのバンダの状況が明らかにされている。この章で重要なのは現代の王位継承をめぐる抗争(第3章)の起源がこの時代にあることである。18世紀に入るとバンダの地域に新たな移民が流入し、当時勢力を拡大していたアサンテ王国に似た王制をこの移民たちが採用した。また、異なる社会集団間で交代で王位継承を行うシステム(1977年に抗争が発生するまで続いていた)もこの時期に確立した。現代のバンダの王族達が自らの王位継承の正統性を主張するために無視しようとしているのがこの歴史的事実である。

第7章の対象は、19世紀から20世紀初頭にかけてのバンダである。この時期のバンダ周辺ではエスニックグループ間の抗争が激しくなると同時に、イギリスによる北部地域への進攻も本格化していた。これらの影響を受けた当時のバンダ人は時には自ら抗

争に参加し、時には攻撃を受けて周辺地域に離散し、あるいはイギリス軍への兵力供給を強制されるなど、大きな社会的混乱を経験した。またこれらの混乱の過程では捕虜や難民の形で各地から多数の人々がバンダ社会の中に流入し、より多様な言語民族的構成がバンダの中にできあがっていった。また物質文化の面では貨幣が次第に重要な役割を担うようになっていった。

第8章では「歴史づくり」における権力の問題がバンダの事例を通じて考察されている。著者は歴史を再構築する試みが常にさまざまな権力の影響を受けると主張する。口頭伝承の採集によって再構築された歴史は当該社会内に存在する権力関係と不可分のものであり、その伝承を語る人物が帰属する集団に都合の良い歴史（不都合な他者の歴史を意図的に無視した歴史）となる危険性を秘めている。植民地政府が残した文献史料に依拠した歴史構築では支配・統治する側の論理とイデオロギーを完全に払拭することはむずかしい。考古学的発掘調査の結果は極めて少数の知的権力を持った考古学者にのみ解釈が可能である。いずれの場合も権力を持たない弱者の側は意識的・無意識的に「歴史づくり」から排除される危険が存在する。これらの危険を認識したうえで、現代バンダ社会における権力の所在と「歴史づくり」の緊張関係や、彼らの日常生活に生き続ける過去の影響力に注目する必要があると著者は述べている。

II 本書の評価

本書が研究対象としているバンダ人の居住地域は西アフリカ全体の中では辺境に位置している。しかしこの辺境地域にあえて注目したことにより、本書はこれまでのいわばメジャーな歴史研究にはない重要な視点を提供している。それはさまざまな権力を内包する「歴史づくり」の過程で沈黙させられてきたマイノリティから見た歴史世界の構築である。具体的には、辺境に位置していたマイノリティのバンダの日常生活が、ニジェール川地域の発展、アサンテ王国の興隆、ヨーロッパ列強との接触などの「重

要な」歴史イベントの陰でどのような変遷を遂げたのかという問いである。これまで注目されてこなかった辺境地域から西アフリカの歴史を問い直すことは、王国や古代都市に関する歴史研究のような、いわば富者と強者の側から見たアフリカ史のバイアスを是正する可能性を持っている。

マイノリティや弱者の歴史に注目するという視点は著者がバンダ社会の内部を見る際にも一貫している。バンダの王族によって語られる口頭伝承はバンダ社会の権力者による「歴史づくり」の一環であり、権力を持たない人々にとっての歴史や権力者の正統性を脅かすような過去の事実は意図的に無視される。著者はこのバイアスを避けるため、移民やマイノリティが語る口頭伝承も丹念に集め、さらには考古学的発掘調査によって普通の人々の日常生活を再構築しようとする。西アフリカにおけるマイノリティとしてのバンダに注目するだけでなく、そのバンダ社会の中でも権力を持たない層の歴史に特に目を配ることによって、一貫して「重要でない」人々の歴史を明らかにしようとする姿勢は評価に値する。

本書のように考古学、文化人類学、歴史学の3領域の成果を統合して歴史の再構築を行うというアプローチ自体は珍しくないが、そのためのフィールドワークをすべて自分自身で行ってきた著者の情熱は並々ならぬものがある。30ページにもわたる本書の文献リストからもわかるように、現地での発掘調査、口頭伝承の採集、ガーナとイギリスの公文書館での文献史料発掘など、膨大な資料の裏付けのもとに本書は執筆されている。さらにこれらの資料の利用に際しては、先述したような「歴史づくり」にまつわる権力の存在を十分に意識しながら、慎重かつ批判的な取り扱いがなされている。データソースの多様性、その量、およびそれらの利用方法など、バンダに関する研究における本書の価値は他に類を見ないものである。

ただしこれら3領域の資料が本書全体において有機的に結合されているかどうかという点については疑問が残る。特に、現代の王位継承をめぐる抗争のような極めて動的・政治的な問題を、発掘調査で得た物質的な資料に基づく歴史的推察と説得的に

関連付けることがそもそも可能なのか、というような疑問は本書の読後も払拭されない。著者もこの点は意識しているようで、「発掘調査で当時の親族構造や権力抗争の実態が明らかにできるわけではないが、これら物質面での証拠は当時の生産活動の実態や富の源泉（ひいては経済的権力の所在）についての考察を可能にする」と主張している（pp.146-147）。しかし評者には、考古学的調査から明らかになった物質面でのバンダの歴史と、口頭伝承の採集や参与観察から明らかになったダイナミックな社会集団間の交渉・抗争の歴史とが、十分に統合されないまま別々に提示されている部分があると感じられた。

このような不満は残るものの、この点によって本

書の価値そのものが減じられることは決していない。「歴史づくり」に潜む権力の問題に注意を払いながら、多くの学問領域の成果をもとにバンダにおける過去と現代の相互関係を明らかにした本書は、アフリカ諸社会の歴史の考察に多くの示唆を与えてくれる。

文献リスト

永原陽子 2001. 「アフリカ史・世界史・比較史」平野克己編『アフリカ比較研究——諸学の挑戦——』アジア経済研究所研究双書 No.512.

（アジア経済研究所地域研究第2部）